



フランクリン自伝再読

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼トランプ前大統領の登場によってアメリカ合衆国の分断が深刻化したようにいわれます。しかし、アメリカ国民が一枚岩であったことは戦時を除けばほとんどないといっているでしょう。そもそも「合衆国」という日本語は国の成り立ちから言っても明らかに誤りで、実際 United States は「合州国」と訳すべきです。その実態は連邦制国家だと考えるべきでしょう。それをあえて誤訳し、そのまま使

つづけているのは、明治以来の中央集権体制に慣らされてきた日本人の思い込みによる悲しい性が誤解を定着させているのではないのでしょうか。

▼アメリカは1776年に8つの州の連合がイギリスからの独立を宣言し、8年に及ぶ苦しい戦いを経て生まれた国です。理不尽な課税など宗主国イギリスの専制支配から脱することを目指した独立戦争でしたが、そこに集った指導者たちは、国家観やものの考え方の異なる人たちであり、しばしば激しい対立が生まれました。そうしたときに対立する意見を調整し、独立という大義の実現へと導いたのがベンジャミン・フランクリンでした。彼は独立後の連邦政府で政治家として重要な地

位を占めることはありませんでしたが、その功績はまさしく「アメリカの父」とよばれるにふさわしいものでした。

▼岩波文庫に収められている「フランクリン自伝」は「福翁自伝」とともに、繰り返し読んで紐解いた少年時代の愛読書でした。波乱万丈の半生を綴った血沸き肉躍る読み物としてだけでなく、社会に対する物の見方を教えてくれる生きた教科書でした。物事を合理的にとらえ、利害得失を考えて判断を下していくフランクリンの行動原理は、後代にプラグマティズムと名付けられた精神であり、前半生の事業家としての成功だけでなく、後半生の政治家、社会運動家、そして独立の闘士としての彼を支え続けたバックボーンでした。

▼独立後もアメリカは一般市民による自治を基盤とする社会であり続けています。連邦政府の権限を強める中央集権化の試みはほとんど成功しませんでした。革命がしばしば新しい独裁を生み出してきた近現代史において、アメリカがそうした専制支配からも免れているのは、イギリスの専制支配からの独立と自治を基盤とする建国の精神が受け継がれてきたからでしょう。兄の経営する印刷業の徒弟奉公から専制的な兄の支配を嫌って飛び出して以来、フランクリンは自らの才覚と合理精神を武器に道を切り開いていきました。その独立自尊の精神こそがフランクリンが生み出したアメリカそのものなのではないでしょうか。